

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

ある日、当時焼津市で現代舞踊研究所をやっていた、今はオーストラリアのホバート前市長夫人となっている、モダンダンスの関山美子さんを訪ねたおき、焼津から静岡へ行く車のなかで、虚空蔵山のふもとの弘徳院に久保山さんのお墓があるからお参りして行きましょうというので、お参りをした事がありました。

勿論久保山さんがピキニで被爆した事は事件当時から知っておりました。その第五福竜丸が転々とし、一時は廃船になっていたのを皆様の手で保存される事となり、野晒しになっていたのが、東京都によって今の立派な展示館が出来、財団法人第五福竜丸平和協会

核の廃絶と軍備撤廃の道を

村松道弥

私の生れは現在は焼津市に編入されているが、当時は大富村といい、北方に高草山という大きな山があって、海の方に向かってなだらかに稜線が下って行き、少し離れておまんじゅうの様な虚空蔵山と云う山があります。その間に富士が見られとても眺めのよい土地でもありました。

ある日、当時焼津市で現代舞踊研究所をやっていた、今はオーストラリアのホバート前市長夫人となっている、モダンダンスの関山美子さんを訪ねたおき、焼津から静岡へ行く車のなかで、虚空蔵山のふもとの弘徳院に久保山さんのお墓があるからお参りして行きましょうというので、お参りをした事がありました。

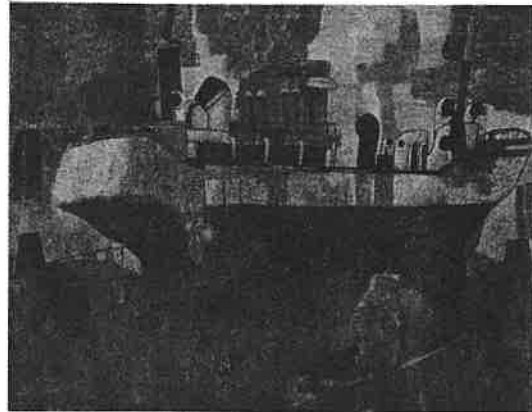
勿論久保山さんがピキニで被爆した事は事件当時から知っておりました。その第五福竜丸が転々とし、一時は廃船になっていたのを皆様の手で保存される事となり、野晒しになっていたのが、東京都によって今の立派な展示館が出来、財団法人第五福竜丸平和協会

更に、会議の事務総長のマーチン・カプラン氏は「日本は年に三百億ないし、四百億ドルもの国防費を使っている。中国の軍事費は五十五億から百五十億ドル程度だ。日本がひとたび軍事支出を増やし始めたなら、どこで止まるかわからない」と懸念している。

一方なくして憲法違反を行い、軍事費をふやしている自民党内閣の竹下首相は日中平和友好条約発効十周年を迎えた十月二十三日メッセージを発表し、その中で「日中平和友好条約の締結は、両国関係に今日みられる輝かしい成果をもたらしたのみならず、アジアひいては世界の平和と繁栄に大きく貢献して来た。いかなる時でも平和を守らねばならないのかねてよりの信念を一層強固にした」といっている。米ソが核軍縮に進んでいる時、日本の軍備増を容認している首相に平和を語る資格はないと思う、空々しいメッセージである。

私達はあくまでも核の廃絶と軍備撤廃の道を世界の未来をつぐ青少年のためにも強力に、力を合せて邁進したいと思っております。

(音楽新聞社会長)



第五福竜丸をとらえる……

作品介绍⑦
寺田政明

北九州八幡出身の寺田政明氏(一九二二年)は、小学生の時ホテル探りで崖から落ち、その時の

怪我で足を悪くした。「私は、子供心にも、体に障害のある自分の将来を考えて、淋しく思った」。約七ヶ月の入院生活中、日曜の休みにいつも絵を描いている若い医師の姿にひきつけられ、「一生絵を描いていこう」と考える。十六歳の時上京し、太平洋洋画会研究所に通う。その後、豊島区に転居し、池袋モンパルナスの仲間たちと絵を描き続ける。不況のどん底で、暗い時代だったが、絵を描くことをやめなかった。一九四三年に豊光、鶴岡政男、松本峻介、井上長三郎、麻生三郎らと新人画会を結成(作品紹介③参照)。戦後は自由美術家協会に参加、一九六四年に主体美術協会を結成、創立会員となる。

寺田氏は、船を見て育った。それも、「働いて、汚れた船に関心があった」。作品も港、船を多く描いている。一九七五年の主体美術協会第十一回展(東京都美術館)には、『死んだ漁船(第五福竜丸)』を出品する。「私は、痛々しいこの船を描きながら、いつしか感情が昂ぶり、不気味な暗示を受け

た」と語っている。前景に描かれたカラスが、漂うような不安を象徴している。

寺田氏は、弱いもの、小さいものにひどくひかれるという。

「第五福竜丸の被災、久保山愛吉さんの死も、働いている人(船)の不幸、悲しみだからこそ、どうしても描いておこうと思った」と語る。



「早晨の港へ焼津」
(一九八〇年)

展示館の点検すむ

第五福竜丸展示館の修理と拡充にかんする専門家による点検が行われています。九月三十日には、三宅会長の依頼により、東大名誉教授の大谷幸夫氏(千葉大学教授・建築学)の調査が行われ、緊急に修理を要する箇所をはじめ、事務室・資料室の設置の緊要性などが指摘されました。

十一月二日には、展示館の設計にあたった杉建築設計事務所杉重彦所長、和泉伸一社長の調査が行われました。今後とも点検をすすめ、東京都へ要請していく予定です。

夢の島熱帯植物館開館

展示館に隣接して建てられていた熱帯植物館がいよいよ十一月十九日開館します。年間来館者目標は三十万人とか。展示館も一層にぎやかになりそうです。

十一月の申し込みあいつく

十月は小学校の社会科見学と共に中学・高校、PTA、生協のグループの見学がたくさんでしたがこれからが最繁忙期。十月末現在十一月の来館予約団体は百を越え、昨年(二万三千人・一五二団体)を上回りそう。応待に大忙しです。

平和随想 (五)

三宅 泰雄

木村先生のご逝去を悼む

去る十月十二日、木村健二郎先生がお亡くなりになりました。木村先生は一九二〇年(大正九年)に東大を卒業、まもなく助教に任ぜられ、次いでヨーロッパに留学、主としてコペンハーゲン大学の、ニールス・ボーア教授の下で学ばれました。ボーア教授は原子構造研究の世界的先駆者で、一九二二年に「原子構造と放射に関する研究」で、ノーベル物理学賞を受賞しています。

当時、ボーアの研究室には、世界中から多数の俊秀が集まり、いわゆる「コペンハーゲン精神」を一九五一年、京都大学で開かれた学会で(左) 木村先生、右(三宅)



学んでいました。木村先生の前は、すでに仁科芳雄博士が、その前年から、ボーア研究室におられました。

木村先生がデンマークから、帰国されたのは一九二七年(昭和二年)でしたが、私はその翌年東大に入り、先生から分析化学の初歩を教えて頂きました。

卒業論文も先生のご指導にあつかり、私の希望で、放射性元素を主成分とする鉱物の研究をさせて頂きました。先生は帰国のさい、ボーア研究室にそなえられていたのと同型のシーグバーン型X線スペクトル分析装置を、教室に輸入されました。当時、この装置をそなえた研究室はヨーロッパの大学でさえ、まだ至って少なかったころでした。私は、この装置を自由に使用して頂き、多くの貴重なデータを得ることができました。

私は卒業後、柴田雄次先生、木村先生のお世話で、創立早々の北大理学部の助手に任じられました。その後、木村先生は教授に昇進され、私が北大から中央気象台(今の気象庁)に転任したときにも、ずいぶんお世話になりました。

木村先生と前後して帰国された仁科博士が、理研でサイクロトロ

ンを完成されたのは、一九三七年(昭和十二年)のことでした。それ以来、木村先生は仁科博士と共同で、元素の人工転換の研究を始められました。そのころヨーロッパの学界でも、ウランに中性子を照射して、新元素をつくる研究が行なわれていました。理研の仁科・木村研でも同様の研究が進んでいました。そのうち、おそい中性子で照射されたウランの中に、多種多様な核種の存在が認められ、木村先生たちは、その解釈に難渋していました。

この謎を解いたのが、ドイツのオットー・ハーンとシュトラスマンでした。ハーンたちは、中性子で照射されたウランの中に生じ、いままでラジウムの同位体と思われていたものが、実はバリウムであることを見出しました。長い間ハーンの無二の同僚であったリゼ・マイトナー女史は、世界大戦の開始直後、ボーアのもとに亡命して来ました。ハーンたちによる新発見の報を聞いたマイトナーは甥のフリッシュと協力し、その機構と巨大なエネルギーの放出を明らかにしました。これこそ、その後の世界を一変させた原子力の発見だったのです。一九三八年末のことでした。

仁科・木村研究室でも、そのころ同様の先駆的研究が行なわれ、もしかしたら、原子力は日本人の手で発見されたかも、というきわどい状態にあったのです。

その原子力の発見から、わずか七年後に、原子爆弾がさく裂し、広島と長崎を全滅させました。木村研究室では、早速、放射性物質の分析にとりくみ、それが原子爆弾であることを確認しました。

さらに、一九五四年におきたビキニ海域での第五福竜丸の遭難のときにも、木村研が率先して、船上にふりつもった「死の灰」の実態を解明し、それが水素爆弾によるものであることを、はじめて世界に知らせました。このとき検出されたウラン二三七の核種は、まさに十数年前、木村先生たちが発見された八種の放射性核種の中の一つでした。この核種に再会して、感無量であったと先生は述べられています。

先生は七年ほど前、第五福竜丸展示館にお見えになり、感慨ふかげに、船をごらんになっていました。その後、先生から第五福竜丸遭難事件当時の新聞を、まとめていただきました。館の大切な資料として保存されています。

終わらないビキニの悲劇

——ロンゲラップ島被ばく者のその後——

毎日新聞大阪本社社会部 中山 安雄

88年夏、日本から二千数百km離れた中部太平洋、マーシャル諸島を訪れた。三十四年前、米国のビキニ水爆実験で、第五福竜丸と同じ死の灰を浴びた同諸島北部のロンゲラップ島の出身者たちの「その後」を知るのが目的だった。

ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・スリーマイル・チェルノブイリ。広島市の平和記念公園に建つ「過ちはくり返しませんから」の碑の言葉がむなしく響くほど、人類が度重ねてきた放射能禍の行方が、残留放射能を浴び続けた島民たちの暮らしの中に暗示されているように思えたからだ。



ロンゲラップ出身者が避難生活を送るクワジャリン環礁は、米国の「SDI」(戦略防衛構想)の一翼を担う「核ミサイル基地」の島でもあった。被ばく者が、放射能の恐怖から逃れるためにたどりついた地が、米ソ間で核戦争が起きた際、最初の攻撃目標とされる重要戦略拠点の一つだったことに大國が支配する世界政治の冷たさと現実を感じる。ドイツ、日本、アメリカと他國の支配を受け続けた住民たちの、苦しみが端的に表われているようにも思えた。

ロンゲラップ島出身者が住むメジャト島は、クワジャリン環礁西端にある。ミサイル基地のある本島から約百六十km、広さ〇・四km、ロンゲラップ島の十分の一の広さの無人島に六十年五月に移住、現在約二百三十人が住む。島には外洋を渡る大型船もなく、定期船航路からもはなれられている。食料、医薬品は、被ばく三世の障害者、ティーム・ジョルジュ君、メジャト島で88年7月、

療品などの生活必需品は三カ月に一度訪れる政府の輸送船による補給に頼らざるを得ない生活が続いている。生活苦と健康の不安におびえ、孤立した生活が、放射能から逃れた代償として住民に残った。

島民がこれまで被った放射能禍は深刻かつ、異様であった。胎児四人を含む八十六人の被ばく者のうちすでに三分の一以上ががんなどで死亡。三十人近い甲狀腺腺腫や多数の異常出産があった。被害は、爆心地から遠く離れていたために広島、長崎のように、「熱風」「爆風」による直接的なものも少なく、放射能被ばくに限られていたと言っただけ。このため、時の経過と共にビキニ水爆実験が人々の記憶の隅に追いやられていくのとは逆に、被ばく者の健康は徐々に体内の「血と細胞」をむしばまれる形で、様々な症状で現われ、恐怖を増大させていった。

メジャト島で、被ばく三世の障害者ティーム・ジョルジュ君(10)を抱いた時、弛緩した筋肉、反応のない視聴覚、人形のようにだらりとたれ下がった手足が、目に見えない放射能の恐怖を必死に私に語りかけているような気がした。

今だにビキニを過去形で語ることでできない現実が、私の腕の中にあった。

マーシャル諸島で出会った米国人科学ジャーナリストは、チェルノブイリ原発事故の取材の一環として、「ビキニのその後を調べに来た」と言った。放射能を手にしてまだ百年の歴史も持たない人類にとって、ビキニの三十四年は、低レベルの放射能被ばくが人体に及ぼす影響を知るかけがえのない経験なんだという。「原発事故により大量の放射能を浴びたヨーロッパの二十世紀の姿が、今のロンゲラップ島出身者の姿なのだ」と熱っぽく語った。

私の取材旅行の最後、首都マジュロで話し合ったチェトン・アンジャイン上院議員の言葉が今も胸に残る。「私たちは放射能の怖さを広島、長崎から科学的に学んだ。そして今、欧米のジャーナリストがこの国を訪れ、私たちから学ぼうとしている。私たちの被害は取り返ししようもないが、せめて未来への糧となれば、それが救いなのです。私たちの過去はみなさんの未来を語っているんですから」。